

2023・松前公園での桜の維持管理講習会での講演等

1 はじめに

令和5年(2023)6月17日(土)に、北海道松前(まつまえ)町の松前公園で開催された「松前町桜維持管理講習会」において、当社樹木医の木戸口和裕が講師となり、講演及びそれに基づく育樹作業を行いました。

主催者は松前さくら研究推進協議会(佐藤均会長:事務局松前町商工観光課)で、松前公園など町内の桜の保全活動を行っている「松前花の会」会員、(一社)まつまえ観光物産協会職員、松前町職員、渡島総合振興局西部森林室職員、樹木医など、20名が参加しました。樹木医は金田正弘氏(日本樹木医会北海道支部長)で、ご子息の紘幸氏とともに、育樹作業の支援のため、参加されました。

2 松前公園について

当該講習会の会場である松前公園は、明治12年(1879)から明治15年(1882)までの3年間で造成されています。公園造成の契機となったのは、明治6年(1873)1月15日の太政官布達です。このような「太政官制公園」としては、道内では函館公園(1879)につぐ歴史のある公園です。

3 講習会の目的と作業対象樹種

主催者代表の佐藤均会長からの挨拶で講習会が始まりました。挨拶の中で『桜の「古木」も大事に維持管理することが大切である』旨のお話があり、講習会の開催目的を明らかにされました。

今回の講習会の作業対象となる栽培品種は、「染井吉野(ソメイヨシノ)」7本、「紅霞桜(ベニカスミザクラ)」1本、「松前紅玉恵(マツマエベニタマエ)」1本の計9本です。

このうち、「紅霞桜」は昭和35年(1960)、「松前紅玉恵」は昭和37年(1962)に、浅利政俊氏が松前町桜保存子供会とともに創出した桜で、比較的新しい桜です。



紅霞桜



松前紅玉恵

今回の「古木」とは、染井吉野を指します。松前公園の染井吉野は、明治33年(1900)に、後の大正天皇となられる皇太子嘉人親王(よしひとしんのう)と旧摂関家出身の九条節子(くじょうさだこ)様とのご成婚を祝う目的で、「松前奉祝会」が結成され、「千株桜」と称して、染井吉野などの桜を松前公園に植えたもので、120年を経ても数多く松前公園内に現存しています。

なお、大正から昭和にかけて活躍した小説家岡田三郎氏は、松前町出身で、現在の小樽潮陵高校の校歌を作詞した人で

す。浅利政俊氏によると、明治33年当時、岡田三郎氏は、松城小学校高等科の生徒で、この染井吉野などの「千株桜」の植樹に参加している、とのこと。

また、函館公園に現存する染井吉野の「古木」は、函館の商人逸見小右衛門（へんみこえもん）が明治24年（1891）、または、明治27年（1894）に植えた桜のいずれかと言われています。浅利政俊氏によると、松前公園の染井吉野は、函館公園の染井吉野に次ぐ「古木」であると思われる、とのこと。

染井吉野が120年を超えて生育しているのは、この栽培品種の親に当たる江戸彼岸や大島桜の影響により、根が強く、ヒコバエや胴吹きを出しやすい、生命力豊かな桜であるからではないかと思われます。



染井吉野



染井吉野（町独自開花宣言用基準木）

4 講演及び作業

(1) 講演

講演では、当社樹木医の木戸口和裕から、①今回の対象木には、「松前奉祝会」が「千株桜」と称して植えた樹齢120年を超える染井吉野が含まれていること、②物語のある「古木」の桜が松前公園には多くあり、このことが道内の他の桜の名所にはない特徴の一つであること、③桜の「古木」を元気に、そして延命させていくことは、歴史を含めた観光振興上、重要であること、を説明しました。

作業の手順としては、①土壌改良材の作成、②エアレーションの実施、③土壌改良材の根の周辺への散布、を説明しました。

次に、土壌改良材の材料は、①フルボ酸の固形の植物活性剤「フジミン®Forest」、②堆肥（豚糞・牛糞ペース）、③火山灰、④竹炭、の5種類です。

これらの使用目的は、①エアレーションは、主に根に空気を与え、細根を発達させるため、②フルボ酸の植物活性剤「フジミン®Forest」は、主に細根からのミネラルの吸収をキレート効果により促進するため、③堆肥はミネラルの補給のため、④火山灰は土壌の透水性を高めるため、⑤竹炭は法幢寺の間伐材を利用したもので、多孔質であり、微生物の住処や肥料分や水分の保管のため、と説明しました。

なお、「フジミン®Forest」については、「ペレット状」のものと同様にドローンでも散布可能な「細粒状」のものがありますが、観光地であることから、ここでは目立たない「細粒状」のものを使用しています。

土壌改良材作成は、それぞれの材料の2分の1を使用して、参加者とともにブルーシート内に量の多い材料から順に投入攪拌し、なるべく均質な材料をつくるようにしました。

(2) 作業

参加者を3班編成し、第1班は、エアレーション、または、土壤改良材の小運搬及び散布、第2班は、土壤改良材の作成を行い、その後、合流して、作業を行っています。第3班は、金田正弘樹木医とご子息紘幸氏が紅霞桜1本を対象に、作業を実施しています。



土壤改良材作成



エアレーション等

5 終わりに

松前公園は、大山桜や霞桜といった道内に生育する野生種だけでなく、染井吉野をはじめ、大島桜系などの「里桜」と言われる多くの栽培品種が生育し、遺伝子資源の宝庫となっています。

道内の公園の草分け的存在である松前公園では、今回の染井吉野のように、多くの「古木」が存在しています。これらは、木材腐朽菌によって、内部腐朽が進んでいますが、一方では、ヒコバエや胴吹きにより、延命を図ろうとする桜も多く見られます。

桜はバラ科の植物で、花芽を多く付ける栽培品種では、土壤改良とともに堆肥による施肥が必要で、ミミズや土壤微生物の働きを活発化させて、土壤を柔らかくしてもらうことが重要と考えています。

このためには、絶えず土壤改良等の育樹作業を行っていく必要があります。今回の講習会に参加いただいた方々は、桜の「育樹」に取り組む「花守」であり、汗を流して作業を行う姿勢に敬意を表します。

こうした「花守」が存在していること自体も、「松前公園」という歴史ある桜の名所たる所以ではないかと思われます。



作業対象木の染井吉野